

べとれへむの星

西村昌能（京都府立洛東高等学校）

前号で、「ベツレヘムの星」[1]という文章を書きました。別のことで調べものをしていて新井白石がこの「ベツレヘムの星」について書いているのに出くわしました。有名な「西洋紀聞」の中にあつたのです。のっけから恐縮ですが、その部分を引用します。〈 〉内は原文のもので、（ ）内は私が文献中の注を入れたり、現代的に改めた所です。

『モイセス（モーゼ）をさる事、凡一千八百年（今をさる事一千七百余年也といふ）、ジュデヨラの国（ユダヤ）、ナザレツ（ナザレ）にサントス＝マリアといふ聖女あり。ヘーテレアム（ベツレヘム）の君、ダアヒット（ダビデ）の後也（ナザレツ、地名也。漢訳未詳。サントスとは、尊称也といふ。余皆これに倣ふべし。マリアは、漢に瑪利亜と訳すといふ。ヘーテレアムは、地名也。ダアヒットは、其君の名。漢訳ともに未詳。）十六歳の時、夢にアンゼルス（天使）降りて、デウス（神）の命を告て。「デウス其子となりて、名をエイズス＝キリストス（イエス・キリスト）といふべし。またサントス＝ジョセフ（ヨゼフ）して、これが父とし、ベイレウエン（ベツレヘム）に産ましめて、エヂップト（エジプト）より、むかえかへすべし」と、いふ事を見る（アンゼルス、前に見えたり。エイズス＝キリストス、漢に耶蘇（モーセ）と訳す。我俗にゼスといひしは、漢訳の音転じ訛れるなり。サントス＝ジョセフ、人の名也。ベイレウエンは、地の名なり。漢訳未詳。エヂップト、前に見ゆ）。こゝにおゐて、ジョセフをとまなひ、ナザレツを去り、ベイレウエンの駅（うまや）に至りて、つゐに男女の道にあづからずして、男子を其厩中に産む、夢見し所によりて、エイズス＝キリストスと名づく（エイズス生まれしは、是歳己丑の年（1709年）を去る事、一千七百九年前の十二月二十五日の夜半といふ。さらば本朝人皇第十代、崇神天皇三十年、辛酉の歳にて、漢平帝元始元年にあたり）。アラビア・タルソ・サバ、三国の君、エイズズが生まれし夜に当りて、**客星現れしを觀て**、聖人ありて生まれし事をしりて、をのをの国を出て、其所をもとむ（アラビアは、今アジアの地方にあり。タルソ・サバ、共にある所をしらず。漢訳共に未詳）。三国の君、同じ所にゆきあひて、共にジュテヨラの君エローデス（ユダヤのヘロデ王）に見えて。此事を問ふ。エローデス其事をしらず、「其人をもとめ得ば、必我がために告知らすべし」と約す。こゝをさりて、行程十三日、ヘイレウエンに至るに、

彼星かしこの上にあたれり。つゐに其駅にして、エイズズを拝する事を得ぬ。アンゼルスありて降りて、三国ノ君を戒むるに、「エイズズの事をもて、ジュデヲラの君に告る事あるべからず」といふ。これ彼こゝろにいむ事あるによれる也。マリアつゐにこゝをさりて、エヂプトにゆく。(後略)』

ながながとなりましたがこの文章は、「創世記」「出エジプト記」に続いて書かれています。つまり、旧約聖書のあとに書かれた新約聖書の部分とすることです。そもそも「西洋紀聞」は、屋久島に渡来して幕府に捉えられたイタリア人宣教師ジョバンニ・バッチスタ・シドッチを新井白石が訊問した時の様子を元に主に西洋の文物、地理。政治・風俗をまとめたものです。ここに書かれているベツレヘムの星の物語は私たちが知っているものと寸分違います。さて、このシドッチの訊問は1709年に行われています。本文中にベツレヘムの星は「客星」と書かれています。客星と常の恒星ではなく、彗星や新星を表す言葉です。1700年当時、ローマカソリックでもベツレヘムの星は新星か彗星であろうと考えていたのかもしれませんが。また、客星は白石がうまく日本語に訳したもので、新星や彗星の意味を持っていたのではないかもしれません。それ以外でも東方の三博士のことなど、現代の我々がベツレヘムの星について知っていることとほぼ同じ事が書かれているのはたいへんおもしろいでしょう。



長崎奉行所キリシタン関係資料のうち聖母像(親指のマリア)。シドッチが携えてきたものと伝えられている[3]。

新井白石の「西洋紀聞」は、日本にキリスト教が上陸してから160年もあとのことですから、もっと古くから「ベツレヘムの星」の話は日本に伝わっていたのだらうと推定できます。1549年にフランシスコ・ザビエル(シャヴィエル)が日本に到着したのが、日本に於けるキリスト教布教の始まりだからです。シャヴィエルがベツレヘムの星を伝えたかどうかは私には、不明ですが、シャヴィエルがベツレヘムの星が唯一書かれている「マタイ伝」の精神でイエズス会に布教を申し入れたということですから、その痕跡があるかと思い、色々と文献を見ますと次の書物にあたりました。



新井白石[4]

すると、外海・五島・長崎系の隠れキリシタンに伝承されてきた「こん

ちりさんのりやく」の中にありました [5]。コンチリサンとはポルトガル語で罪を悔い、赦しを祈ること（痛悔）のことで、これはいわゆるオラシヨ（祈祷書）です。「りやく」は略のことだと言われています。日本司教ルイス・セルケイルが表し1603年に島原で金属活字印刷されて刊行されたようですが、今に残っているのは筆写・暗誦・口伝で伝えられた写本ですから、訛りがかなり見受けられます。マリア様が「丸や」となっていたり、ルソン（フィリピン）の王と賤しいが賢く美しいの娘「丸や」へ横恋慕の話にすり替わっていたり、「かぐや姫」みたいな物語にも変質しています。では、「こんちりさんのりやく」のベツレヘムの星をながめてみましょう。

『・・・しばらくありて、つるこの国の帝王めんてう、めしこの国の帝王がすばる、ふらんこの国帝王ぼうとざる、此三人御告をかふむりて、出たゝせたもふ所、道すがら、段々に候得ども、ふしぎをかふむり、三方の道にて一しよにゆきやい、つのりようて連れ立たもふ。其時**指南（しるべ）の星**を目当てとして、べれん〈ベツレヘム〉の国ゑぞつきにけり。

此国の帝王よろうてつ〈ヘロデ王〉の支配所なれば、是に立より、尋ねてみると、三人は此所にぞ立よりて、「此国ゑ天より御主誕生と、告をかふむり、参りたり。おしゑたまへ」といふければ、よろうてつきいて、「其沙汰いまだきゝ申さず」とこたゑ、又三人、「よろうてつも、ともに拝みにまいらるべし」といふ。「いやちよ、郎（まろ）はまいるまじ。まづまづ三人御出」といふければ、しからは、さやういたさんと、三人うちつれ、たち出みれば、あら笑止や、**目当（めあて）の星**の見ゑざりけり。

「さてさて此所に立よりしゆへなるかな。残念」と、三人一しよに天にむかいて手をあわせ、「何とぞ光を得させたまへ」とねがいければ、にわか**目当（みあて）の指南（じゆるべ）の星**、手にとるごとく、見ゑければ、さてこそといそぎければ、ほどなく着きて、礼拝（らいはい）ある。其時十三日目也。

御主のたもふは、「三人はいずれかたよりまいられ候や」と御たづね、三人こたえて、「**御主の証（しゆるし）の星**を見かければ、をばゑず、こゝにまいりし」といふ。御主仰けるは、「ただいま三人きたる道、悪人みち也。ゆへに今は消へはてし也。よつて此方より、三つの道をこしらへ、かへすべし」仰ければ、はつとひれふし待ちければ、間もなく天の釣橋三すぢにかゝり、此三人に三すぢの道を得て、おもふまゝわが国々ゑこそはかゑりけり。・・・』

太字は私がつけました。このように、信仰のしるべとなった書物もあるいは娯楽や慰めの要素があつたのかもしれないと思います。ところで日本でベツレヘムの星が普及した出したのはいつからでしょうか。私は昭和初め

のクリスマスツリーの普及、大正 11 年、クリスマスケーキが不二屋での発売されたのと同時期ではないかと密かに思っています。



熊本県天草市のパチンコ屋さんにて、夏だというのにマリア様としめ縄が同居しています。御利益はどちら側にあるのでしょうか。

参考文献

[1] 西村昌能 「ベツレヘムの星」 あすとろん vol.5 p21 2009 年 1 月

[2] 新井白石「西洋紀聞」松村明校注 日本思想体系 35「新井白石」p73
岩波書店 1975 年

[3]<http://bunka.nii.ac.jp/ResultImage.do?heritageId=92369&imageNum=0&linkType=big>

[4]<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E4%BA%95%E7%99%BD%E7%9F%B3>

[5]「こんちりさんのりやく」 片岡弥吉校注 日本思想体系 25「キリシタン書 排耶書」p359 および解説 p627 岩波書店 1970 年

※ 本タイトルの「べとれへむの星」の「べとれへむ」はカソリックでよく使われる表現で、ひらがなで書くことで当時の雰囲気を出したものです。当時、「べとれへむの星」と言われていた確証はありません。